

二次元ドリーム文庫／PDF立ち読み版



小説 瀧澤 春

挿絵 七海綾音

第一章

召しませ王子様〜どなたがお好み？

006

第二章

召しませ王子様〜淫乱王女は栄養満点

055

第三章

召しませ王子様〜高飛車王女はピリリと辛い

097

第四章

召しませ王子様〜忍者少女は意外と小味!?

151

第五章

召しませ王子様〜フルコースは愛する人と

186

登場人物紹介

Characters



マリス・イル・オーランジュ

「緑の国」の王子。小柄で中性的な面立ちの少年。気が弱いわけではなく、押しに弱い。

アリア・フォン・リーデンハイム

大陸の中原にある「剣の国」の第一王女。マリスの幼馴染で許婚。気が強く男勝りで、生真面目な性格。剣の腕前は当代随一と名高い。

ミーズリ・ラ・アルテシア

西方にある「紺碧の国」の第一王女。大人びた風貌の女性で、温かく包容力があり、母性が溢れている。お風呂好き。

ルウナ・ムー・マムルーク

南方にある「炎の国」の第一王女。女性優位の社会で育てられたため、高飛車で尊大でワガママ。

りん
麟

マリスに仕える優秀な隠密。しかし隠密という立場を離れれば、恥ずかしがり屋で純粋な少女。主君であるマリスの優しさに惹かれている。

ごくんと生唾を飲む。ストッキングに包まれて蒸れているせいか、舌先に汗のしょっぱさが広がる。それでも嫌な感じはしなかった。肌から香る女性の香りに小鼻がひくつく。

「ひい……ンッ！」

高飛車王女の小さな身体がびくつと跳ねた。マリスはといえば、ぴちゃぺちゃ……ぷちや、と驕慢王女に言われた通り足の指に舌を沿わせていく。ストッキングが唾液を吸って、足先に黒い染みが大きく広がった。

（やっぱり女の子は、身体のパーツが小さいな……）

そんな感慨を心中で抱きながら、舌の動きを速めた。ストッキング越し、その肌の柔らかさが前歯に響く。ちゅうっぱちゅうっぱつ。軽く頭を揺り動かしながら繊細に舌を動かせば、足指の塩辛さは段々角が取れて、まるやかなものへと変わっていく気がした。

（もしかして気持ちいいのかな？）

足指を舐めれば、ルウナの身体がかすかに震える。特にそれは指と指の間を突いた時が殊更強かった。そして籐椅子の肘置においた手がぎゅうううーつと強く握られている。

（僕も……うう、あ、熱くなってきたよ……っ。あ、足を綺麗にしなきゃいけないのに）

股間の辺りが鈍く痺れていた。収まりかけていたと思っていたが、少女の匂い……甘酸っぱいそれが少年の身体をまた昂奮へと導いていくのだ。

「んちゅっ……ちゅばっ、ちゅるるる……ッ」

ストッキングと一緒に五指を頬張り、唾液を絡めながら、一本ずつ丁寧に足指を舐め穿る。マリスが熱心に足指へ奉仕する様は堂に入り、まるで炎の王女に永年仕えてきた従者であるかのような。王女の足指はツルツルしていて、舌粘膜にふわりと乗った。

「んっ！ んう……ああっ……ああ……ンああああ……」

王女は段々とその息を引き攣らせながら、目元を紅くさせる。眼を細める様は猫のようで、今にも喉奥からゴロゴロという鳴き声が聞こえてきそう。

「むっ……うむ……ちゅううう……ぱっ！」

「あっ——あふうああああ……っ♪」

甲高いとろけるような声を上げ、椅子の背もたれに強く寄りかかる高飛車王女。少年はそれと同時に、ピンッと平行に伸ばされた少女の足に、喉奥を突かれて軽く咽せた。

「へほっ……うつく……る、ルウナ……今、へほっ……もしかして……イツちゃ——」

「な、何じゃ……イク、じゃと!? 馬鹿めっ！ な、何を馬鹿なことを……きや……あ」

高慢王女が正面を見据えれば、かわいらしい声を漏らす。その双眸は、マリスのズボンに張られたテントに集中した。ルウナの顔がみるみるうちに紅くなっていく。

「そ、そなたっ！ わ、妾の足を口に含みながら感じておったのか、この変態め……！」

「え——あっ！ あ、これは……ご、ごめんなさい……っ！」

端から見れば、足を舐めさせた方も変態にカテゴライズされそうだが、王女はそんなこ

とは知らないというそぶり。マリスの反応がルウナの理不尽な叱責を肯定してしまう。

「妾に欲情するなど……な、生意気じゃ！ ええい、その無礼な塊を見せてみよッ」

少年がいきなりの要求に対して戸惑えば。

「見せよと申しているッ！ わ……妾の足をしゃぶり、昂奮したその穢らしいものを！」
《炎の国》の王女らしく、ルウナはそれこそ燃え上がる炎のような苛烈さを剥き出す。

その剣幕を受け、少年はすっかり欲情してしまった勃起を見せる。丁度、ズボンに張られたテントを突き出す形。情けなさど羞ずかしさで、王子は紅髪王女を正視出来ない。

「何をしておるのじゃ!? 服越しでは、わ、分からぬ！ 脱ぐのじゃ、妾に……そなたの穢らしいものをもっとよく見せよッ。そ、そして……妾への無礼を謝るのじゃぞッ……！」
マリスは恥ずかしくなりながら、ズボンとパンツを下ろした。身体がすっかり王女の命令に従うことに慣らされてしまっている。

「きゃっ……お、大きい……何と大きい……は、破廉恥な匂い……。……ハッ！」

瞳はどこか虚ろに、少女は熱っぽいため息をついたかと思うと。正気を取り戻したかのように軽く頭を揺すって、すぐに元通りの引き締まったものへと戻す。

「……な、何をボサッとしておるのじゃ、早う謝れ！ 謝るのじゃッ！」

「ッ！ ……ごめんなさい……ルウナ……ぼ、僕は足をな、舐め……なっ、舐めながら……
……こ、昂奮し、して……し、しまいました……お、お許しく、だっ、さいい……っ」

少年は謝りながら、どんどん昂奮していることを自覚した。そのあどけない顔とは裏腹に、欲深な獣性を丸出しの肉砲。先走りがぴゅぴゅっと漏れ、床に染みをつくる。

「み、見下げたぞ。そんな不淨の肉を膨らませるとは……ッ！ 恥を知れ、うつけっ」

マリスが元はといえばルウナがこんな変なことをさせるからだ、と、反駁しようとするも。

「問答無用じゃ！ ふ、ふん。そんなに足が好きなのか、妾の足がそんなに好きなのか!?」

王女は色白の肌を真っ赤に燃やし、碧眼を輝かせる。そして少年が黙ったままでいると、こめかみへと青筋を浮かせ、突然鋭い足撃で怒張の先端部分をシュートしてきた！

「!? かッ……アあッ……!!」

敏感な粘膜質への手加減無用の蹴りに、頭蓋が激震に包まれた。

びくっ、びくっ、びくっ……ッ！ 浜へ打ちあげられた魚のように肉勃起が荒々しくのたうつ。

「やはり虐められて昂奮しておるのじゃな、この変態め……ッ」

「あ……あ……う、うう………はぐぐぐッ」

黒艶に輝くストッキング足で、亀頭冠の輪郭を今度は、キックとは裏腹に優しく包まれて刺激される。ストッキングが粘膜質と擦れて起きる静電気に、薄皮を剥がされるようなくすぐったさが、剛直を舐った。

「はあ。何て熱いのか……！ そなたっ、女にこのようなことをされて悔しくないのか？ さっきもそうじゃ……妾に命じられるがままになることに何も感じないのかッ!?」

ゾクゾクするようなサディスティックな笑みを浮かべ、思うがままに少年を罵倒する紅毛の烈女。少年はずぶ濡れの子犬のような憐憫さを纏い、ただただ純粋に謝る。しかし謝れば謝るほど、罪悪感と同時に腹の底に蠕わだかまっていた情欲がどんどんと大きくなって収拾がつかなくなっていく。先走りもやがて精液の混ざり出した白濁液へと変わる。

「ご、ごめんな……あひやあ！ ……つつくうン……！」

自分でも女の子のような悲鳴を上げていることを、羞ずかしいと思う。しかし全く怒りはなかった。罵倒され、また自分の肉棒が乱暴に蹴られているのに、全身が栗立つような快感が、果てなく全身を走るのだ。

「何とだらしなく、ふしだらで、節操なしのおちゃんぼなのじゃッ!!」

ルウナは両足を使い始める。少女は双碧眸をギラつかせながら、龟头冠をたつぷりと弄り、また片方の足では出っ張ったカリスを足裏で潰しにかかったのだ。陰囊がきゅ……きゅうん！ と引き攣り、尿道が甘く締めつけられ、息苦しくなった。

（あつ……どうして、こんな乱暴にされてるのに。も、もう出ちゃいそうだよ……!）

絶頂の気配は、怒張した肉砲を一回り肥大させる。そして先走りの量もその夥しさを増し、尿臭さも一緒に漏らした。それを全てストッキングがチュチュと吸ってくれると思うと、もっと擦りつけたいと屈折した思いが増長して、腰を迫り出してしまふ。

「まだ大きくうつ……そ、それに匂いまで何ときついじゃ！ そなたは今、妾から罰を

受けているのに、その罰にさえ昂奮し、欲情しているのかっ……この痴れ者めッ！」

マリスの耳には、すでに少女の声が遠くに聞こえていた。敏感な生殖器がストッキングの搔痒感にいたぶられ、熱く爛れ始める。肉棒はまだ足りないとかかりにびく…びく…びく…と藻掻き続け、じゃじゃ馬王女の足はまるで焦らすように離れていった。もっとしてよと言わんばかりの物欲し気な王子の顔が、いじめっ子王女の心を擦る。

「ふふふ。穢らしい肉がビクビクと揺れておる。それほど妾の足は気持ちよかったか？」足先にべっちょりと絡みついた先走り液が粘糸を引いて、やがてぷちんと切れる。すでにストッキングの元の色が分からないぐらいカウパーで変色していた。

「……………あ——っ……………くわあ——っ……………あっ……………はあああ……………！」

久々の解放感に漏らす息は燃えるように熱く、今にも肺が火だるまになりそうだ。

「これは罰じゃから、苦しまねばならぬのだっ。これからお前の穢らしいモノが一番どこで感じるのか、たつぷりと調べてやるぞっ……」

いきなり裏筋を足指で突つつかれる。ぶり返す快感。しかしそれは鳥の羽で擦られるような、少年の欲棒が達しそうで達しない中途半端な刺激だ。

出そうで出ない。今にも噴火しようと、輸精管をすごい勢いで上ってきた夥しい精液が、身体の中へ戻っていくのは、腹の底が燃え上がるように感じられて気が狂いそうになる。

「すごいぞ、マリスっ……白っぽく、臭い液体がどんどん湧きだしてくる。……ここじゃ

な？　ここであろう？　ここで、臭い体液をつくっているのであらうっ!？」

裏筋を弄っていた指が、幹を走る静脈をなぞるように下へ落ちていく。そしてさつきから射精を何度も妨害され、幾らか膨らみを増す陰囊を軽く蹴られる。

「ッ……!？」

一瞬気が遠くなり、全身が激しく痙攣した。鍛えようのない急所を軽めの力とはいえ打たれれば、下腹へ拳をねじ込まれるような鋭い痛みがズキンッと響く。

「おお……。なにやら硬いものが入っておるようじゃなっ……。この袋にはっ!」

コリッ、コリコリ……。陰囊越し睾丸をやわやわと踏みつける高飛車姫。ストッキンズの滑らかさが絡みつき、骨が溶けそうな痛痒感がゾクゾクッと脳髓を駆け上がっていく。「うわっ……。うぐっ……。ああっ、ダメ……。う、うわ……。ルウナあ……。やめてえ!」

汗を吸ってヌルつく足先は極上の責め具となつて、少年の腹筋を攣らせる。それはまるで熱した鉄玉を、体内へ落とされるようで、ジーンと焦熱感が下腹を中心に広がっていく。「ええい、何を気持ちのよさそうな顔をしておるのじゃっ! ……えいっ!」

「うわああ……。っ!!」

根元部分への責めに気が向いていたせいか、亀頭がすごい力で圧迫された時。一瞬視界が暗転して、少年は喉が裂けんばかりに仰け反った。

「ほら、ほらっ!　どうなの——どうなのじゃッ!？」



しゅっしゅっしゅん！　まるで栓抜きで瓶の蓋を抜こうとするかのように、亀頭冠を片足の母趾、第二趾とで挟まれ、強烈な擦過を繰り返される。

「どうじゃ、どうじゃ、感じるのであらう、感じるのであらうッ!?」

にちゃっ、くちゅっ、ちゅばん！　ベール越し、王女とは思えない淫蕩な笑みを浮かべ、激しく両足を動かしてくる。少年のカウパーを吸って又チャ又チャするストッキングは粘つき、足の力と柔らかな肌の弾力とで、一本の肉芯がもみくちゃにされてしまう。

「や、めっ……そんなに擦ったら取れひやう、おちんちん取れちやうよおおお……ッ!!」

足が織りなす屈辱的な責め。王家の嫡男は脳髓への快美注入に翻弄され、何度も白目を剥く。そして意識が沈んでいく一方で、精力旺盛な若い肉体は飽きもせず、びちゃびちゃあつ……とカウパー腺液を飛び散らせ、黒ストッキングに妖しい染みを幾つもつくっていく。ストッキングとの擦過感が尿道を突き刺し、尻奥を熱く滾らせた。

「はっ！……アッ……アアッ……アアアッ……!!!」

マリスは敏感粘膜を集中的に責められ、尿道口を灼かれる快感から逃げようとする。しかし茎部分を足裏で押さえられて固定され、腰を引けば食い込みはさらに激しくなった。

「汗が白くなっていくぞ。気持ちよいのじゃな！　王族のクセに変態なヤツじゃ」

快感曲線は爆発的な山形を描き、射精ボルテージもまた泡が膨れるように沸騰した。

「イけ！　足で感じさせられていくのじゃ！　白い液体を射せ、この変態王子ッ!!」

王女の足指が裏筋を挟るように食い込めば、全神経のバルブが一時に全開になった。

「ふわ、も、もう、もうっ！ ……うわああああ、だめえだああああ……ッ!!!」

ビュルルルルル……ビュツつく！ どくどく……ドククウウウ———ンンッ!!

尿道が攣れてしまうほどの凄まじい爆発力が、亀頭で弾ける。石油が湧き出したかと思わんばかりに、鳥もちのごとく原液に近い白濁が宙へ躍り出た。スペルマが輸精管をドリフト走行で飛び出すたび、腰砕けになる

「ふわあああ……出る！ あああ……とまらないよおお……！」

伸縮を繰り返し、欲望を吐瀉し続ける勃起。マリスの思考は真っ白に煮崩れ、身体をぐぐぐいーっと迫り出して小さなブリッジを描いた。

「何じゃ、これは。……ああ……スゴイ……まさに種馬のごとき生殖能力じゃ……！」

これ見よがしに吐き散らかされた白濁液が、黒いストッキングに包まれた少女の太股まで届いて、乙女の肌をぐちゃぐちゃに汚し尽くしていた。所々張りついた白液塊が、ねっとり糸を引いて垂れる様は淫靡だけでなく、マリスの性欲をさらに煽ってしまうほどだ。

「おおッ!! まだ出るぞっ……絞れば出るものじゃな！」

射精したばかりで敏感すぎる肉棒を両足裏で固定され、出の悪くなったチューブを根元から押し出すかのような強搾行為。

「え、ふわああ……やめっ……あつ、あああっ……っ!!」

「ええ。好きただけ姉様、って言っているわよ、麟ちゃんっ♪」

こうなると羽交い締めも、年の離れた妹の世話をする姉という感じに見える。

「さあ、麟ちゃん。兄様を困らせちゃった罰、受けようね。大丈夫。お姉ちゃんがしっかりと助けて、出来るだけ痛くないようにしてあげるわ……」

緩く羽交い締めにながら、ミーズリは少女の胸元を大きく開く。それに連動して腰帯がフワッと緩まり、サラシの巻かれた胸元が肩口まで露わになった。さっきの絶頂の時、暴れたせいだろうか。サラシは乱れ、崩れたその隙間から食べ頃の紅い実がのぞく。可憐な柔肉の盛り上がりは下から上へゆっくり肉肌を撫でつけて、ツンと上向き。びっしりかいた汗がサラシに染み込んで、柔肉そして乳首へと淫らに絡みついている。

「まあ、かわいらしい胸……っ♥」

「ふわっ…姉様あん…あああっ！」

乳首を撫でられただけで、麟は身体をビクンと跳ねさせる。白いサラシがほぐれ、露わになる二つの乳首の粒状突起は、全部がさらけ出されるよりもいやらしい気がした。

「麟ちゃん見て。あたなのおま○こグズグズに濡れてる。すごく感じやすいのねっ♪」

「あ、姉様あああ……っ！」

ミーズリが胸を撫でると麟の身体は小刻みに震え、少女は涙目で身悶える。

確かに陰唇は大洪水だった。和風ショーツは、今や元の色が分からないほどズブ濡れ。

胸を触るたびに、どぷっどぷっ……と艶めかしい水音を立てて愛液が大量に滴った。

「ほーら、マリス様も……ご覧になって下さいな。……エッチなおま○こでしょ？」

それまで擬似姉妹プレイの美しさに、眼を奪われていたマリス。自分の名を呼ばれて金縛りが解けたかのようにゆっくりと近づく。ギシッ、ギッ……ゆっくりとベッドの軋む音が、まるで少年自身の鼓動を表しているように、段々大きくなる。

（すごい……きれいなおま○こだ……。それにもう本気汁でいっぱいじゃないか……っ）

快感部位を何度となく擦られた余波だろうか。キュッと閉まっていた両脚は力なく、帯のユルユルのスカートはだらしないほどにパツクリ口を開く。そしてミニスカート奥の聖域はさつきよりもずっと、奥深くまで見ることが出来た。顔を近づければ、甘露な蜜が脳内に染み込んでくる。二本の細い脚のつけ根――愛液を吸った和風ショーツは卑猥に撚れて、微塵攣する肉襞と絡み合う。噴き出す濁汁は、透明分泌液を押し流して、ミニスカートをべっとり濡らす。白濁粘液を漏らす淫口はクリームで唇をべちゃべちゃにした幼児のような無邪気さ、鼻をくすぐる大人の色香を持ち合わせていた。肉棒は蜜の匂いに反応して、甘い痺れに蠕動する。

「麟……んっ……んんんーっ……んすうううう……！」

マリスは少女の脚の間に首を突っ込み、それがまるで極上の匂い袋であるかのように小鼻をひくつかせた。口いっぱい牝蜜を堪能するように、原色の色香に淫欲が煮詰まる。

「あああつ、いやああつ……いやです。兄様ッ……！」

御庭番少女は、自由になる首をイヤイヤと左右に振る。

「だめえええ、リンのおお、麟のえっちい所の匂い、そんな嗅いじやいやああ……」

女蜜は唾液のようにただ甘いだけではない。まったりとして濃厚、酸味が利いて……さつき漏らした尿素も鼻の奥を熱くさせる。まるで軟骨をどろりと溶けさせるようだ。

「あらあら、羞ずかしがるなんて……。麟ちゃん、これはね。お仕置きなの。もしこれを耐えられなかったら……。兄様に嫌われちゃうかもしれないのよ？」

「ふ、ふええ……。い、いや、嫌われたくない……。麟、頑張る……。頑張るもん……」

少女の嫌がりの声がびたりと収まった。ぐすぐす、と鼻を鳴らしている。

「舐めてぐらい言わなきや……。兄様には許してもらえないかもねンッ」

王子は御庭番少女の股の中心にいて、それこそ跳び上がらんばかりに驚く。

（ここを舐める……？ 今まで触ったり、挿れたりはしたけれど、舐めるなんて……）

性的好奇心に、マリスの肉棒の芯が熱膨張する。一度アリアとはそれに近い状況になったが、あの時は半ば事故という状況だっただけで、不可抗力に近いだろう。積極的に舐めるという段になって、期待に胸が膨らむ。

一方ミーズリは忍少女へ熱心に、兄様を愉しませなきやいけないんだからと吹き込み続ける。すると紺碧の王女の言葉に交じり、「んっ」と頷くような声が忍者少女から漏れた。

「兄様、どうか……リン、麟のおま○こ……ぺろぺろっ……し、しちゃって下さいっ！」
少年はドキドキしながら、えろえろえろ……と白蜜で濡れた秘所へと舌先を這わせる。
「はあう……っ！」

熱い汁が舌腹に広がれば、陰囊が過度な女の匂いを受けて昂奮に膨らんだ気がする。するとびっくり箱から出てきた道化のごとく、少女の身体は小さく跳ね上がった。

「うううっ……ひい……ん！」

舌先で愛蜜をどんどん舐め取る。匂いはたつぷりと口腔の中へと充満していき、吸れば吸るほど味の濃厚さも増していくようだ。呼吸するたび、ますます多くの血液が海綿体へ充填されていく。

（もっと違う所とか、舐めたらどうなのかな……？）

王子は性的探求心を強く覚え、今度は蜜が漏れるその入り口に舌先を挿入してみた。

ぐちいい……にゅぐっ……ぴちゃあ……泥濘に舌を通せば、じんわあ……と汁が零れ出てきた。すると、濃厚なミルク飴を口に含んだ時のような、深い味わいが口腔ばかりか、喉にまで溢れてくる。

「あああっ！ あっ……アアッー！ は、入ってええ……入って……ううう」

マリスは砂漠のど真ん中に捨てられた犬のように、女の園に湧き続けるオアシスを吸った。麟の昂奮の具合が伝播したように、王子の射精ボルテージは少しずつ上昇していく。

「あらあら、マリス様、妹のおま〇こはそんなに美味しいのですか？」

少年がうむ、うむっと唸りながら、首を縦に揺らせば、それに舌までもが連動して、さらに忍少女の肉花弁を攪拌した。舌粘膜が今にも弾けそうな愛液の濃厚さが心地いい。

「あ、あつ……はああ……っ！」

「うふふ、マリス様。隣ちゃん……すぐ感じているようですわ……。でもそこばかりじゃなくて、見えませんか。お豆みたいになつて……もの」

少年は秘境で宝物を探し出そうとするトレジャーハンターのように隅々にまで眼を走らせて、そのほんのり艶を持つて輝く肉芯を探し当てた。発見の悦びに全身が総毛つ。

「あつたあ……！」

「ふわあつ……ひっ、ひっ、ひい。あ、兄様、しゃ、喋らないでえ！ 息が当たって、身体あ、痺れちゃううう……はむウツ!?」

少女の強靱な筋力に塗り固められた両脚がぐいぐいインと、マリスの頭を挟もうと迫り来る。しかし少年はその脚をグッと、両脇に挟み込んで動きを封じた。

「そこは、クリトリスといって女の人ですぐ感じてしまう、エッチなお豆さんなんですわ……ほら、ちよつと舐めてみてくださいいな」

粘膜伝いにある秘芽はすっかり充血して、甘美な輝きを発している。ぴとっ……。少年がそこへ舌先を食い込ませれば、少女は身体の中で爆竹でも炸裂したかのように跳ね上が

った。チュッ……チュパッ……。チュククッ……チュクッ。少年は丹念に舌先で弄び、唾液を絡ませていく。すると花芯が突如その色をより鮮明にしたのだ。

「ヒイヒイヒイ……!!」

麟が今まで以上に激しく身体を戦慄させ、金属的な叫びを上げた。

（む、剥けた……!?!）

少年はクリトリスが芯部を露わにした変化に戸惑いながら、舌先で弄れば弄るほど、忍者少女の悲鳴が強くなっていくことに嗜虐性を刺激された。舌を通じて、麟の快感が伝わってくるようだ。エレクトリシした勃起を取り巻く電流快はより濃くなる。

「だ、だめええ……そこ、ダメえええええ……兄様、兄様、あにさまあああッ！」

少女の声が被虐美を醸し出し、王子の嗜虐性を否応なく高める。マリスは罪悪感を抱きながら、花芯が女体に与える影響に昂奮を募らせ、舐りの速度を一層速めた。

ぺちやぺちや……じゅるるる……ぺちよぺちよ、ロロロロロロロ……。

「ふわあっ……あああっ……! きゃあふうう……!!」

御庭番少女の声を聞き、舐め続ける。マリスの顔は汗でベトベトで余裕がない。

（うう……早く挿入しないと、このまま……出ちゃいそうだよ……!）

肉棒を握ってみれば茎部はすでに先走りでねちよねちよで、芯部は血潮が火のついたガ

ソリンのように熱くなっていた。このまま扱けば、すぐにでも絶頂できそうだ。

「兄様あ……も、もうり、リン……ンッ、はあ……く、狂ってしまいまふうう……っ」

御庭番少女は顔を真つ赤にしながら、その瞳は黒く曇っていた。

「さ、マリス様もうそろそろ挿入してあげないと。ん。わたくしも感じてきちゃった♪」
少年はスカートから顔を上げる。そしていよいよ、蜜でぐちゃぐちゃのその秘孔へと肉棒を押しつけた。舌先で感じるよりもずっと熱い感触が、龟头粘膜をしやぶってくる。

グッと瞬間的に腹筋に力を入れる——危うく射精しかけてしまった。

「ふわあ、……あつ、あああ……お、大きい……兄様の大きすぎるうう……ウウ！」

両脚を抱え込み、未成熟なヴァギナへの侵入を深めていく。まだ先っぽだけなのに、肉が軋むほどの万力だ。マリスの頭の中で、紫色の稲光が幾つも走り抜けた。

「すごい……麟の膣……キツくて、うつく……すごいかもっ！」

どぶどぶう……ぐちゅうう……ぐちゅう……じゅぶぶぶ……。膣肉へとめり込めばめり込むほどに、溢れ出る愛蜜。寝室に広がる芳しい花香。一度の排尿絶頂を遂げて、多少膣肉は弛んではいたが、それでも腰砕けになりそうな締めつけは未だ強烈だ。

「兄様がどんどん入って……あつ、アアッ……！」

痛みに顔を歪める麟。しかし一度の絶頂、そして痛みを和らげようというミーズリからの配慮——乳首タッチを続けられ、泣き声めいた喘ぎに蜜が混ざる。やがて龟头は薄い弾



力のある感触に激しく反応する。それが処女膜であることはすぐに分かった。

すぐにも乱暴に突き通したい欲望に身体が打ち震え、尿道がグングンと熱を帯びる。

「痛い！ 痛い！ 痛い！ ……ふわああ……兄様、姉様！ く、苦しいよお。やめてえ……ひいはあつ……よしてええええ……!!」

マリスは今の中途半端な痛みの状態から、麟を早く解放してあげようと、腰を乱暴に迫り出して処女膜を突き破った。ぐりっ、ぐりりりっ……ブチィー！

「……………~~~~っ!!!」

御庭番少女は声にならない雄叫びを上げ、腕をマリスの首へ回した。骨が軋む痛みが全身を奔った。しかしそうかと思えば。魂が抜けていくように、ぐったりと脱力する。

愛蜜を吐き出しながら、破瓜血を零す幼腔。処女膜を破って肉棒を沈めれば、やはりそこは未成熟な果実。最奥に先端がぶつかっても、マリスの勃起はまだ二割ちよつとはみ出してしまふ。しかしそれだけに、粘膜の先端でたつぷりと子宮口を感じる事が出来た。

「どう、麟ちゃん……今あなたの胎に、兄様のいやらしいおちんぼが埋まっているのよ」

少女は喉を引き攣らせながら、あうあうと呻く。そしてゆっくり震える手で自分のお腹を撫でさすり始めた。その振動が強く締めつける襞を波打たせ、肉棒が擦り潰される。

「あっ……ふあああ……し、幸せ。……兄様が腔にいい……うんっ、ふかい……!!」

麟は汗を満遍なく塗り込めた薄胸をぐいぐいと擦りつけてくる。巻かれたサラシは汗や、先走りでもちよべちよ。肌に吸いついたサラシが括り出した乳房は、幼いながら倒錯的な悦びで勃起を研磨する。剛直にしつこく擦りつけるせいかサラシの締めまりが緩み、汗の滲んだ下乳と乳輪が隙間からのぞいた。女の匂いが、汗と混ざって濃厚スープのごとく王子の嗅覚を塗り潰せば、びくびくうんと肉幹は激しく戦慄する。

「あっ♪ はああああ……ン、素敵い……びくびくして、最高ですわああン！」

ぐにいいん、にゆるるるん、ぐううむうん！ マリスの目の前でミーズリは谷間に汗をびっしょりとかき、これでもかと男性器を容赦なく潰してくる。脂肉が燃え上がりそうな体温が、勃起に染み込んで静脈の一筋に到るまで煮崩れしてしまいそうだ。

腰が疼きによって持ち上げられれば、亀頭がぷりぷりとした乳肉にぶつかり、汗のヌメヌメした泥濘に沈み込む。病みつきになってしまいそうな女肉の、どこまでも食い込んでいきそうな肉感を浴びるほど味わえば、先端粘膜は歓喜に打ち震えた。

（すごい！ こんなにおっぱいが、僕のを包んでるなんてえ！）

三組六つの美乳たち。それが惜しげもなく勃起へ迫り、快感のバックを施す。

ミーズリのパンパンに中身の詰まったクリームの柔らかさに亀頭が震え、巨乳を上向きに保ち続けるためによく鍛えられた胸筋の撓りは、どれだけ勃起へ絡みついた時にも形崩れせず、まるで王子の勃起に形を合わせるようにぐにゅむんと弾力を忘れることなく

柔軟に潰れて、優しく押し包んでくれる。

ルウナの小ぶりながらも、美しい球形の吸いつきの強さ。そのサイズはマリスの勃起を包むのに丁度いい。そして乳首の硬さ、上乳と下乳の吸いつく弾力が甘く静脈を囁んでくれてゾゾッと総毛立つほどに気持ちよかった。

隣はほとんど平板に近いながらも乳首が返しのようになってカリを何度も爪弾き、胸全体を使つての大胆な奉仕で勃起を^{なめ}驟してくる。心臓のドキドキが伝わってきて、柔らかな一体感に情感がとろけた。

快感を呼び起こす懸命さ——悦びの三重奏が女体という最高のスコアを元に腰椎、脊椎、頸椎へと奏でられ、頭が真っ赤に灼けつきそうだった。

（うわあああ……女の人のいい匂いで……い、息が出来なくなっちゃうよお！）

汗を胸全体にかいて、蒸し蒸しとした乳房肉の荒波。醸し出す女匂は噎せ返るほどに濃厚で、空気が桃色に見えてしまいそう。眼前が霞みに包まれ、腹腔が激しくヒクついた。

「感じておるな？ マリス、亀頭が今にもそなたの穢らしい汁を吐き出しそうじゃぞっ！」

先走りをサンオイルのように乳房に塗りつけた炎の王女は、サディスティックな微笑を浮かべる。体温が上がり、ほんのり乳肌が赤みを帯びているのがまた情欲をそそられた。

「まあっ、ルウナったらいやらしいですわね……んふふ……。マリス様のおちんぽやっぱり遅いですわあ。もうちよつとこの硬さ、味わっていたいです。頑張ってくださいね？」

マリスが呼吸をするたびに、三人の美女の馥郁たる色香が喉を通り抜け、肺腑に満ち、少年の悦びを新たな次元へと引き上げるのだ。柔らかな女肉が肌を覆い、幸せな温かさのぼせそうだ。ビクッ、ビクビクビクウウ！ 暴発してしまいそうなほどにそそり勃つ肉棒が軋む。マリスは沸騰する生殖欲求に耐えきれず、目の前が真っ白になった。

「出る！ 出るウウ……！」

「ダメですつ、まだです、兄様あつ！」

輸精管を急激に上り詰める精液。しかし。尿道で火花が上がるほどの激しい摩擦感と放精感は訪れなかった。神経がのたうち回るほどの中途半端な刺激に、海綿体全体が熱く焦げる。まるで身体が紅蓮の炎に囚われ、ローストされていくようだ。

（しゃ、射精出来ない!? い、一体どうしたんだ!?）

薄眼だったものをしっかりと開けてみれば、射精をした形跡はなく、そればかりか大きなカサを立派に広げた肉峰が聳えていた。ただ絶頂寸前まで追い込まれていたのか、白濁のカウパーがにゅぶつ、じゅぶつ……と先端から溢れかえる。そして野太い肉茎には、さつきはなかった白い布が螺旋に絡みついていた。

「ふう、間一髪間に合いました……これでいいですね、姉様」

「ええ、ありがとう。隣ちゃん……さすがは忍者さんだわっ……うふっ♪」

ミーズリと隣の意味深な言葉に疑問を抱きながら、忍少女の胸元を見れば。さつきまで

その薄い胸元を覆っていたサラシが取り払われ、麟の剥き出しになった胸元からは、モチモチしたささやかな膨らみ、そして乳首の鮮やかな朱色がのぞく。

「兄様、ごめん……。でももうちょっとだけ頑張つて！」

王子の肉棒はいつ暴発してしまうかしの危険な状態。しかしサラシが巻きついたことにより、輸精管がキュッと締められ、射精を封じられてしまう。汗を吸ったサラシがキュッキュッと肉棒に噛みつく。まるで真綿で首を絞められるようで、イタ気持ちいい感触が尿道を疼かせる。

（うく……。でそうでない……。もどかしすぎるよおっ……。！）

快感に喉を仰け反らせるマリスへ大胆に押しつけられる乳房。ぐしよ濡れのサラシがそれによって、肉竿へと密に吸着して静脈が鬱血しそう。

「ふふ、なかなかすごいことをするな。しかし、これならばもっと激しいことをしてもよいということじゃなっ！」

「い、いや、そ、そんなことは……。うわああっ……。ッ!?」

緑の王子は下腹部に感じた、骨盤が弾けそうな激感に打ち震えた。今にも肉棒が破裂して精液が溢れるのではないかと危ぶむほど、竿全体がメラメラと燃え上がる——と、突然ズキッと、下腹に甘痺が響いた。

（い、今のなんだっ……。!?）

モミモミ……モミモミ。今にもはち切れんばかりにパンパンに膨張した勃起へ容赦ない刺激が与えられ、このまま肉竿が白濁の精液になってドロッドロに溶けてしまいそうだ。

「う、うう……な、何を……う、うわ、わああ……な、何を！ ううううう……!?」

マリスが眼を落とせば、キツい角度でそり勃つ肉棒の根元から下がる陰囊——そこに白い腕が三本伸び、三美人が柔らかな指先で精巢を玩弄していたのだ。

どれも手加減したやんわりとした握り方だが、男の急所を丹念に責められていることに変わりはない。それも同時に三つの手で。精巢は二つだから、手が一つ余る。美女たちはマリスの睾丸を奪おうと火花を散らし合い、躍起になっているのだ。すべやかな白魚の群の中でもみくちやにされるアツアツの陰囊。下腹部からの柔らかい搾囊と、彼女たちの真っ赤に充血した乳首が硬度を保ったまま重々しく震える様とが相乗効果を生み出して、叶わない射精欲求が底なしに心臓を衝き上げてきた。

「ミーズリ！ そなたのお乳邪魔じゃぞつ、恥知らずのデカパイめ……！」

「あらあら、ルウナ……。ご自分の身体と比べての嫉妬はかわいくありませんわつ」

決して小さくないルウナの乳房と、それを包み込んでもまだ余裕のある豊穠な乳房を誇るミーズリが争えば、そのたびに乳肉同士が重々しく擦れ合う。柔肉の刺激は射精を封じられている男根をムニムインと圧し、捌け口のない射精衝動をさらに強めてマリスを苦しめる。やがてミーズリ的美巨乳とルウナの柔肉が互いの乳肉肌を舐めるように食い込み、

炎の王女のドレスの左上半身が汗で滑って、ズリズリと下がっていく。美しい形状を保ちながら、カップに包まれていたルウナの左乳がぷりりと躍り出て、熱情がかすかな甘酸っぱい香りとなって弾けた。右カップも乳房の弾力に煽られる形で生乳がまろび出て、その肌は汗で煌めく。

やがてルウナの柔肉のはだけに巻き取られ、砲弾のように盛り上がったミーズリの爆乳も右胸のブラは乳首を包み直すように引き上げられる。そして左胸のカップは剥き出しになった。卑猥に充血した乳首を支えるように、肉付きは下弦の方が上弦より豊かだ。ブラという支えがなくなったせい、王女が暴れる乳房を下からそっと抱えるように固定すれば掌で下乳肉がにゅむうんと潰れ、パンケーキのような甘い柔らかさが強調される。

「あはっ……♪ ルウナのかわいいおっぱいと、マリス様のデカちんぽが擦れて……んんはっ……すごい気持ちいいですわあっ！」

「やめよおお……あううっ……うう！ そなたの乳首がああ……妾の胸に食い込んで……刺さっ……くう、はあっ……身体が熱くなってしまうう……！」

半ばレズプレイにはまり始めた二人の振動は、マリスの方にも伝わってくる。亀頭粘膜がミルクで煮詰めた柔らかな脂肉に包まれ、むにゅるっ、にゅぐうんと揉み込まれると鈴口は喘ぎ喘ぎ小さな開閉を繰り返す。そのたびに締め上げられた勃起肌が燃えるように熟し、転がされている陰囊が線香花火のようにパチパチッと弾けた。

（だめだあ……このままじゃ、僕のが壊れちゃう！ 壊れちゃうよおお……！）

闘ぎ合う柔肉の隙間に見え隠れする王子の勃起。それが射精のため空蠕動を繰り返し、心臓が痛いほどに拍動した。一本の屹立を囲む柔肉のとろけるような甘さとすべやかな肌感触が殺到してきて容赦がない。今にも屹立がミルクのように溶けて、乳肌と同化しそう。

「えへへ……兄様のとつても太くて硬くて……すごいですうっ！」

鈴口辺りの露払いをする麟がチロチロと舌を伸ばす。肉棒全域に絡みついたサラシは、マリスが足掻けば足掻くほど、充血した海綿体へ深く食い込む。もう頭は射精のことしか考えられない。狂おしい射精欲求の痙攣が全身を駆けめぐり、雄渾な勃起の震えに合わせ、全身がビクビククッ……と跳ねて収まらない。

「り、りいん！ も、もうお願いだから！ これをほどこいて、本当にも……もうう！」

全身を粟立たせマリスは、身体の中に溶岩を注ぎ込まれたような恐慌状態に陥る。

「何じゃ……軟弱……ンっ……ものめっ！ こ、これぐらいもつと耐えるのじゃ！」

ルウナのプリプリした球肉が亀頭の裏筋を包み込むように吸い、龟头粘膜を粗く搔いた。
「~~~~~っ」

射精不発による欲求不満に集中力は千々に乱れて、意識が暗く澱む。剛直は甘酸っぱい乳果にずむずむとめり込み、甘美な肉感に摩擦される。擦りつけられた汗が燃え上がった。

「麟ちゃん……もう、いいわ……サラシ、ほどこいてあげてえン♥」

麟は忍の早業で少年の勃起に巻きつけたサラシをほどく。全身の筋肉がグズグズに溶けるように一気に脱力した。肉柱には螺旋状にサラシの巻きついた通り、白い痕跡が痛々しく残る。しかしすぐにもそこへ血が巡り、健康的な紅みを取り戻す。

「ウウウッ……ハアアア……!!」

急速に満たされていく血流に、マリスの脳裏は真っ赤に塗り潰される。

「さあ、存分にイっちゃていいのようンッ♪」

「ええい、イってしまえ。妾に、そなたの薄汚く、生臭い精液をぶっかけるのじゃ!」

「兄様来てええ——!!」

すべやかな指先が陰囊を指でグッと締め上げる。そして三人娘の乳房が同時に強く押しつけられ、それぞれの乳房がモチモチした乳肉を絡みつかせ、楕円に潰れながらカリを噛んできた。目眩しそうなほどに下腹へと漲っていた精力が、一気に爆発する。

びゅるるるるっ、どびゅるるっ、ぐびゃっ、じゅばああっ、ずずびゅううううう!!

「ウウウウアアア……ワアアア……ワアアアアア——ッ!!」

圧迫を重ねていた輸精管が一気に解放され、超高濃度にまで圧縮された精液が遡った。

力強く中空へ打ち上げられ、進む半固形のマグマスperlマ。肉竿全体が激しい蠢動、収斂を繰り返す。龟头は壊れんばかりに揺れて、マリスの理性は真っ赤に灼ける。

びゅるるるああっっ、どばばばばっ、ずびゅううううう……ッ!



王子の精液は、出しても出してもまだ出てきた。

「んなああああ……！ 熱い……いつ嗅いでも何て匂うのじゃッ……!!」

「ああッ！ マリス様の熱いですわあ……ン♪」

「兄様ああンンンン……っ！」

何もかもスペルマと一緒に吐き散らしていくように、射精快は間断なく前立腺を挟った。
(すごい……みんな、真っ白になってる……僕が汚してるんだ……!)

吐き出される精液が三つの不揃いの肉果に降り注ぎ、その優美な曲線を白く泡立たせる。
汗でヌルヌルだった乳肌、さらに男性ホルモン汁を一杯に浴びて、トロトロに溶けていく。ネトリ絡みつく白濁精液の隙間からのぞいた充血乳首の紅さが眼にも鮮やかに飛び込んでくる。マリスは今まで絶頂出来なかった分を取り返そうとするかのように、先端から溢れた先走りを、差し出された柔肉へ押しつける。龟头が乳房の膨らみを扱き、挟れば、乳肌は見事に撓み、粘つく乳肌の柔らかさが、屹立をズリズリと舐め穿る。

やがて最後の一滴まで精液を射^たし終わった少年は焦点の合わない瞳で、女たちを見た。ぐちゃりと顔や髪に張りついた粘液がどろおおお……つと糸を引きながら、丸みのある女体を滑り落ちていく様は、溶けたバターを頭からかぶったようだ。ミーズリの深淵な谷間にザーメンが吸い込まれる。すると胸に精液の小さな泉が出来上がる。

女たちの濃密な色香と濃厚な白濁液が混ざり合って、爛れた空気を醸し出した。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>